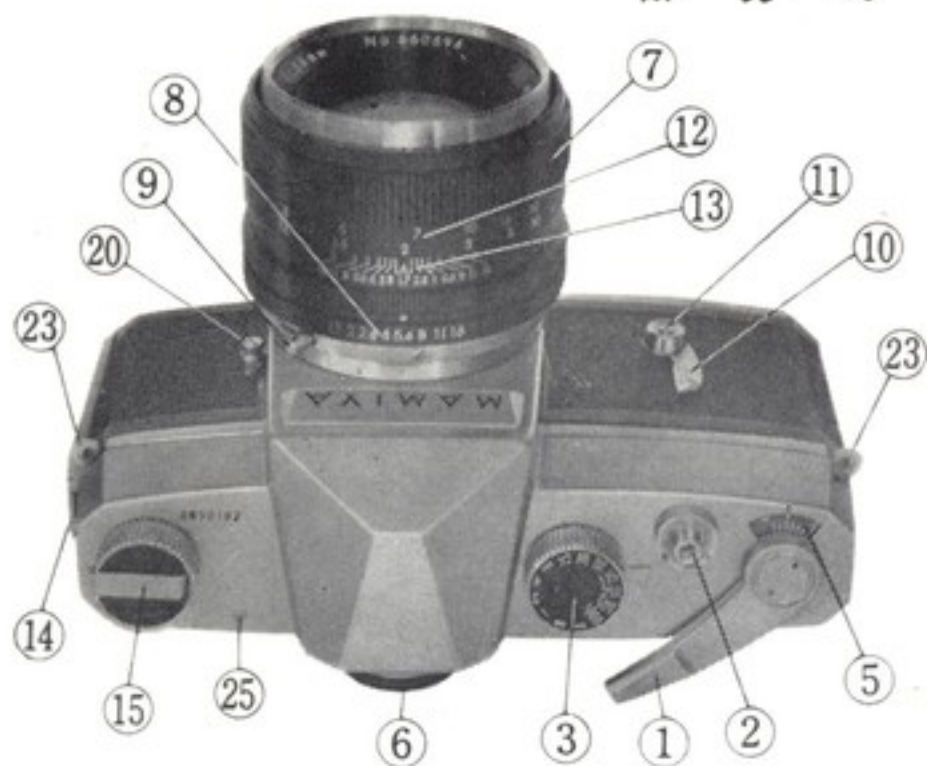


マミヤ
プリズマツト
WP型



の
使
い
方

部分の名称

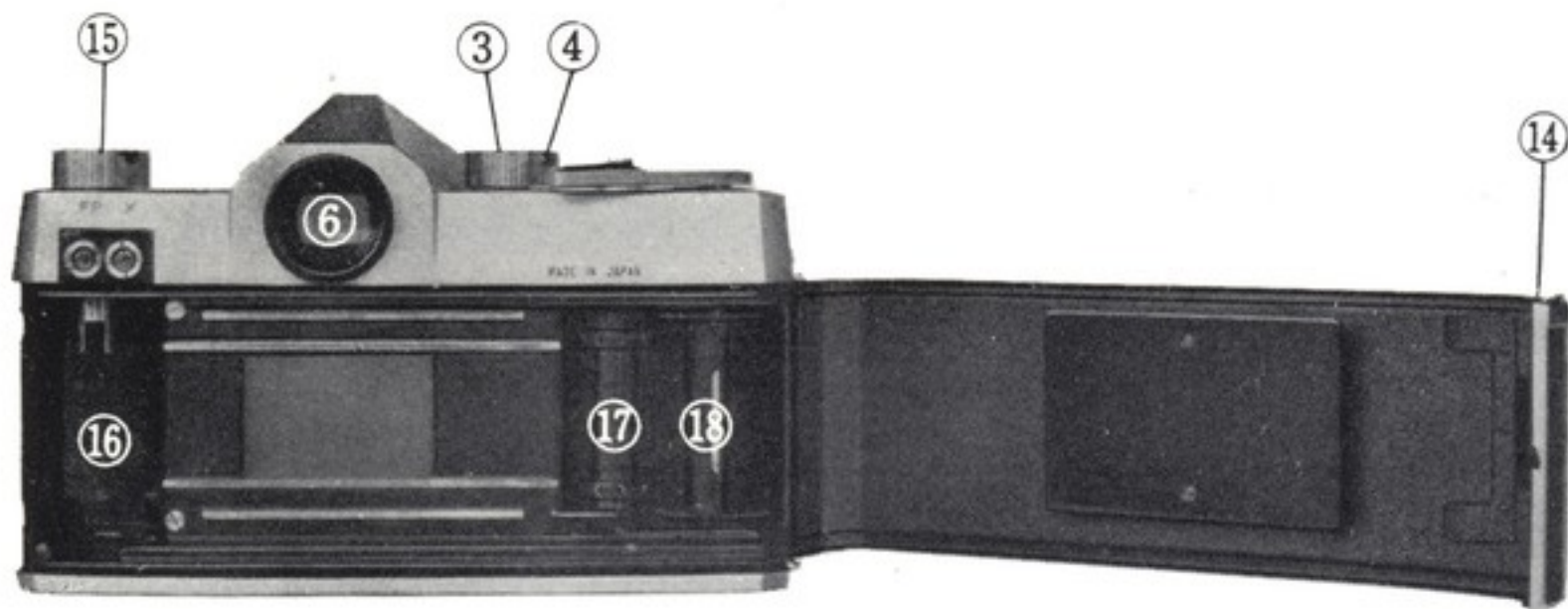


1. フィルム巻上げレバー
2. シャッター・ボタン (リリース穴兼用)
3. シャッター・ダイヤル (露出時間ダイヤル)
4. 露出計連動用ピン
5. 撮影枚数表示窓
6. ファインダのぞき窓



7. 焦点調節リング
8. 絞り変更リング
9. 深度点検ボタン
10. セルフタイマ・レバー
11. セルフタイマ作動ボタン
12. 距離目もり

- | | |
|------------------|---------------------|
| 13. 被写体深度目もり | 20. レンズ・ロック・ボタン |
| 14. 裏ぶた開閉金具 | 21. シンクロ・ターミナル (左右) |
| 15. フィルム巻もどしクランク | 22. フィルム・ダイヤル |
| 16. フィルム倉 | 23. つり金具 (左右) |
| 17. スプロケット | 24. 三脚用ねじ穴 |
| 18. 巻取スプール | 25. 焦点面指示マーク |
| 19. スプロケット解除ボタン | |



フィルムを入れる前に

フィルムの入れ方などは、通常の35ミリ・カメラと大差ありませんから、特に一眼レフであるがゆえに異なる点を、ご説明申し上げます。

ファインダで見たままが写る

本機はペンタプリズム式の一眼レフ・カメラですから、フィルム面上に写ると全く同じの像をファインダで、ながめながら、写真を撮る、写すことができます。そしてシャッターを切った瞬間には、ファインダの像が見えなくなりますが、そのまま、また、すぐに像が見えるようになります。

焦点調節

レンズから入った光を、内部の鏡（ミラー）で上方に反射し、ピント・ガラスに像を結ばせます。これをペンタプリズムで三回反射させて、ファインダのぞき窓（6）から、ながめますから、上下左右のちゃんとした正像が見えます。像のピントは、焦点調節リング（7）を回して合わせます。鮮鋭な像が見えるとき、シャッター・ボタン（2）を押して、シャッターを切れば、よろしいのです。

撮影レンズそのものの結ぶ像を見るのですから、どんな交換レンズを使用しているときでも、絶対にパララックスがありません。またファインダで見ているままが写り、ピントの合ったところから、前後のボケの具合、被写体と背景の関係に至るまで、正確に確かめることができます。なお標準レンズ（F1.7, 58ミリ, 7枚構成, 画角40°50'）の無限遠の位置で、実物と等倍の映像が見えます。

まばたくだけで、いつでも明るいファインダ

クイック・リターン・ミラー

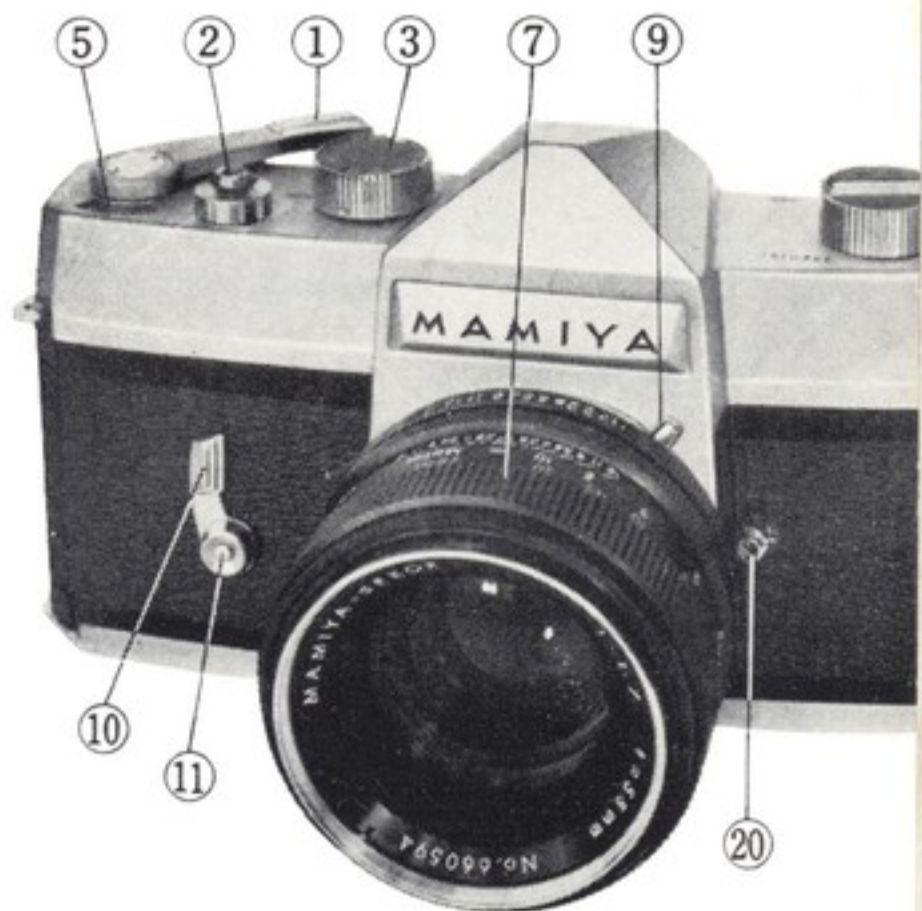
この機構のおかげで、シャッターを切ると、シャッターの幕が開いているときだけ、鏡（ミラー）が上方にあがり、幕が閉じると、ミラーが下にさがります。したがって、ファインダの像は、シャッターが切られた瞬間以外は、常に見えています。

撮影レンズが結ぶ像を、ながめるのですから、絞りを小さくすると、像が暗くなるわけです。しかし、これではファインダが、見にくくなります。そこでピントを合わせて、被写体の像を、ながめるときには、絞りが開放になっており、シャッターを切ったときだけ、自動的に望みの絞りになる仕掛けがあると便利です。

ウイंक・リターン

それが、この完全自動絞り機構です。したがって本機のファインダは、絞りの値に関係がなく、いつでも絞り開放の像が見えます。シャッターが切られて、ファインダの像が見えなくなったときに、絞りは、所定の絞りに絞られ、ファインダが明るくなると同時に、絞りは、また開放にもどります。

そこで、写真が写る際の絞りの効果を知りたいときは、どうするかという問題が起りますが、それには深度点検ボタン(9)を、止まるまで軽く押し下げれば、よろしいのです。



シャッターはフィルムを巻くと掛かる

シャッターが掛かっているときには、フィルムは巻き上げられません。

シャッター・ダイヤル

シャッター・ダイヤル（露出時間ダイヤル）(3)は、等間隔・倍数目もりの一軸不回転式です。シャッターを掛ける前後、いつでも、また左右いずれの方向にも、自由に回して、露出時間を定めることができ、各露出時間において、クリック・ストップいたします。

ダイヤルをBに合わせて、シャッターを切ると、ボタン(2)を押している間じゅう、シャッターが開いています。

ダイヤルをTに合わせて、ボタン(2)を押しますと、シャッターが開いたままになります。次にシャッター・ダイヤル(3)をBのほうに動かしますと、シャッターが閉じます。この場合ダイヤルを $1/1000$ のほうに動かしても、シャッターが閉じますが、なるべくBのほうに回して下さい。

専用の連動露出計が連動する

専用の連動露出計をカメラに取り付け、フィルムの感光度に合わせて、露出時間に連動いたします。

そこでカメラを被写体に向け、露出計上の露出時間ダイヤルを希望の値に合わせて、露出計の指針が指示する露出計ダイヤル上の値と同じ値に、レンズの絞りを合わせます。

あるいは、レンズの絞りを希望の値にして、露出計上の露出時間ダイヤルを回し、露出計ダイヤル上の同じ値の目もり線を露出計の指針に合わせてみます。これで露出は適正となります。

露出計をカメラに取り付けるには、シャッター・ダイヤル(3)と露出計の露出時間ダイヤルの目もりの位置を合わせ、ファインダのぞき窓(6)のレンズわくを、ゆるめて露出計の取り付け脚を、ここにさし込みながら、両ダイヤル部をかみ合わせて装着し、最後にレンズわくを、しめつけます。

自分を写すことができる

時間調節が可能なセルフタイマがついています。

セルフタイマ

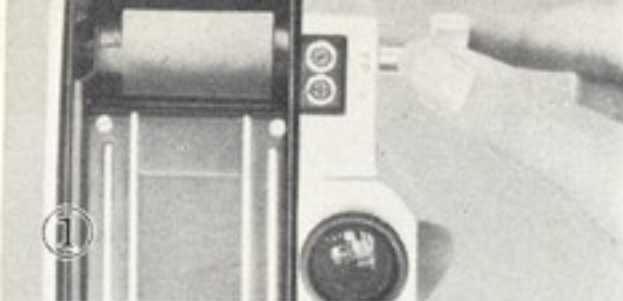
セルフタイマ・レバー(10)を、反時計方向に約180度回せば、10秒近くの時間が掛かり、レバーを70度以上回せば、その範囲内で、自由に時間を調節できます。作動は、レバー中心軸のセルフタイマ作動ボタン(11)によります。したがって、セルフタイマを掛けたあとでも、シャッター・ボタン(2)を押せば、セルフタイマは働かずに、シャッターが切れます。

なおセルフタイマを作動させるときは、シャッターを掛けておかななくてはなりません。そしてセルフタイマでシャッターを切っても、自動絞り機構が働きます。

フィルムの入れ方

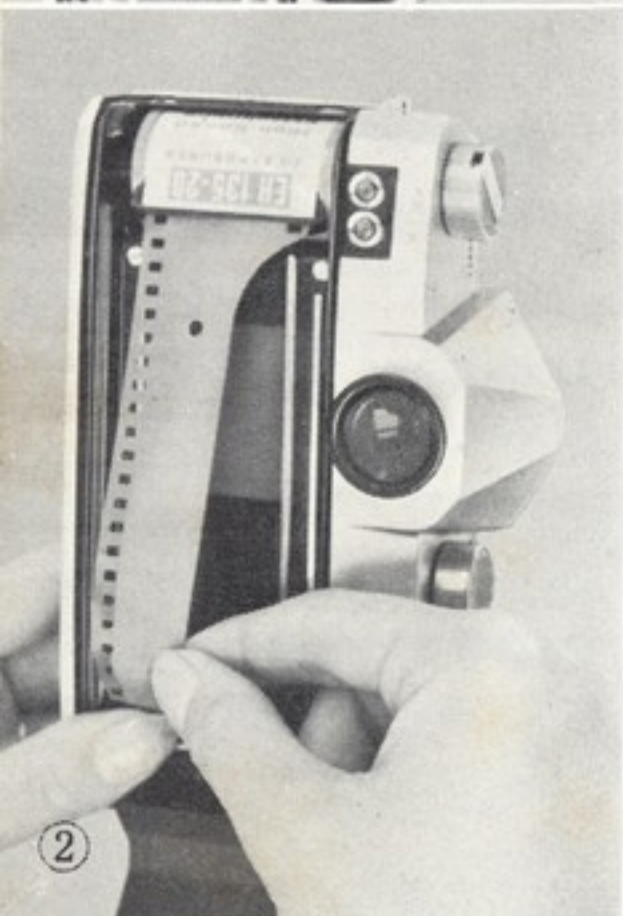
フィルムは、通常の35ミリ・フィルムを使用いたします。黑白でもカラーでも、また20枚どりでも36枚どりでも、パトローネ入りならば、自由に使用できます。出し入れする際は、直射日光をさけて、日蔭で行なって下さい。

1. 裏ぶた開閉金具(14)を引き出して、裏ぶたをあけましたならば、巻もどしクランク(15)を完全



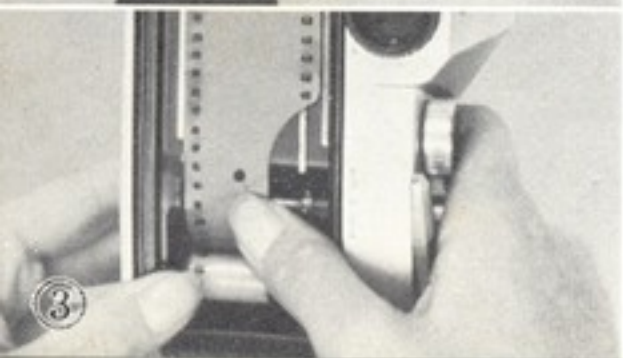
に引き出します。(第一図)

2. 次にパトローネの向きに気をつけながら、フィルムをフィルム倉(16)に入れ、引き上げたクラックをピッタリともともにもどします。クラックが浮き上がっているときには、少しどちらかに回せば、パチンと落ち着きます。そしてフィルムを10センチぐらい引き出しましたら、その先端を5ミリほど、パーフォレーションの穴のところを外側に折りまげます。(第二図)



3. 巻取スプール(18)の下端のつばに指先をあてて、スプールをフィルム倉の方向(スプロケットの回転方向と逆)に回しながら、その折りまがりをも、スプールのみぞにうまく差し込むと同時に、指先で押えて、しっかりとスプールに巻きつけてゆきます。この際フィルムをスプールの下端のつばに押しつけながら、フィルムの穴がスプロケットの歯に、正しくかみあうように注意いたします。(第三図)

4. 次にフィルムがゆるまないように押えながら、巻もどしクラック(15)を矢印の方向にまいて、パトローネの中のフィルムのたるみを、すっかりなくします。(第四図)



5. たるみを、すっかりとりのぞきましたら、スプールのつばに指先をあてて、フィルムを少しまいてみます。スプロケットの歯がフィルム

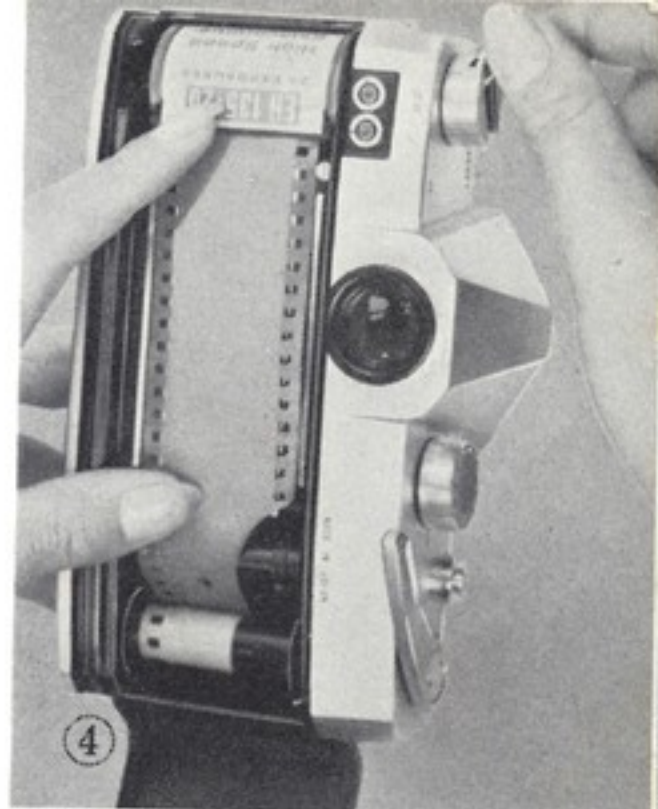
の穴に正しくかみあい、巻もどしクランク(15)が反時計方向に回転しながら、フィルムがするするとパトローネから出てくるようでしたら、裏ぶたをしめます。この際フィルムの穴が両側とも、スプロケットの歯にかみあうほど、巻き込みますと、36枚とれないことがあります。

6. このとき、撮影枚数表示窓(5)に、Sが表われています。そこでレンズをおおい、フィルム巻上げレバー(1)を巻き上げて、表示窓が1を指すまで、から写しをつづけますと、最初の1枚目の準備ができあがります。

7. 最後に、カメラの背面についているフィルム・ダイヤル(22)を回して、入れたフィルムの特性を、はっきりわかるように表示しておきます。フィルム感光度表示盤(A S Aダイヤル)の50と100及び100と200の間の・印は80及び160のA S A値を示します。

カメラの構え方

左手のひらで、カメラの底を支える気持にして、親指と人さし指をレンズの焦点調節リング(7)にもってゆくようにします。右手は、手のひらで、ボデーの端をつかむようにしますと、ひとりでに人さし指は、シャッター・ボタン(2)のそばにゆき、親指はフィルム巻上げレバー(1)の





頭にかかります。

これでファインダのぞき窓(6)を、目に当てれば、安定のよい持ち方ができます。要するに左手をカメラ保持の主体とし、右手はボデーを軽く支えるようにして構えます。(A図)

縦位置撮影の場合も、フィルム巻上げレバー(1)を上方にして構えるときは、横位置の場合と同じ要領です。左ひじは、できるだけ、からだに、しっかりとつけて構えます。(B図)

巻上げレバー(1)を下方にするときは、右手の親指をシャッター・ボタン(2)に当てながら、手のひらでカメラを支え、左手の親指と人さし指を焦点調節リング(7)に当てます。右ひじは、からだにピッタリとつけて下さい。(C図)

以上の構え方は、レンズを交換したときも同じです。

焦点の合わせ方

フィルム巻上げレバー(1)を、止まるまで十分に巻いて、シャッターをセットしたあとで、ファインダのぞき窓(6)を、のぞきます。映像が、はっきりしないときは、焦点調節リング(7)を回して焦点を調節いたします。



深度点検ボタン(9)を使うと、絞りがセットした値まで絞られますから、この絞りならどのくらいの奥行まで焦点が合うか、どうかは肉眼でわかります。

被写体が暗くて、肉眼で焦点の合う位置が、よくわからないときは、距離目もり(12)と、絞りの値を刻んである被写体深度目もり(13)を読み合わせて、被写体深度を知ると判断できます。正確に被写体深度を確かめる必要があるときは、被写体深度表を利用して下さい。

赤外フィルムを使用のとき

赤外フィルムを入れたときには、距離目もり用の指標として、右側にある赤文字R付の指標を使います。すなわち、ファインダで焦点を調節してから、距離目もり(12)を見て、R指標が、その目もりの位置を指すまで、レンズを繰り出して補正するのです。これは通常より奥のほうの位置に、像を結ぶ光線にのみ、フィルムを感じるからです。

フィルムの取りはずし

20枚、あるいは36枚どりの、いずれの場合にしましても、規定の枚数だけ撮影をすませましたら、撮影を中止してフィルムを巻きもどして下さい。

1. カメラ底面のスプロケット解除ボタン(19)を十分に押しますと、ボタンが引きこみます。そこでフィルム巻きもどしクランク(15)を起して、矢印方向に回し、撮影済みのフィルムをパトローネに巻きもどします。

2. フィルムが終りになりますと、手ごたえでわかりますから、フィルムの終りの端末まで、すっ

被 写 体 深 度 表

マミヤ・セコール F 1.7, 58 ミリ

(錯乱円 4.33 / 1,000 センチ)

距離 絞り	∞	10	5	3	2	1.5	1.2	1	0.9	0.8	0.7	0.65	0.6	0.55	0.5 メートル
1.7	46.27 ∞	8.25 12.71	4.53 5.59	2.83 3.20	1.92 2.08	1.46 1.54	1.17 1.23	0.982 1.018	0.886 0.915	0.789 0.811	0.692 0.708	0.643 0.657	0.594 0.606	0.545 0.555	0.496 0.504
2	39.34 ∞	8.00 13.35	4.45 5.70	2.80 3.23	1.91 2.10	1.45 1.55	1.17 1.23	0.979 1.022	0.883 0.917	0.787 0.813	0.691 0.710	0.642 0.658	0.593 0.607	0.545 0.555	0.496 0.504
2.8	28.11 ∞	7.41 15.42	4.27 6.04	2.72 3.34	1.88 2.14	1.43 1.58	1.16 1.25	0.971 1.031	0.877 0.924	0.782 0.819	0.687 0.714	0.639 0.661	0.591 0.609	0.543 0.558	0.494 0.506
4	19.70 ∞	6.67 20.09	4.01 6.64	2.62 3.51	1.83 2.21	1.40 1.61	1.14 1.27	0.959 1.045	0.868 0.935	0.775 0.827	0.681 0.720	0.634 0.667	0.587 0.614	0.539 0.561	0.492 0.509
5.6	14.08 ∞	5.89 33.77	3.72 7.65	2.50 3.76	1.77 2.30	1.37 1.66	1.12 1.30	0.944 1.064	0.855 0.950	0.765 0.838	0.674 0.728	0.628 0.673	0.582 0.619	0.535 0.566	0.488 0.512
8	9.87 ∞	5.01 ∞	3.36 9.91	2.33 4.23	1.69 2.46	1.32 1.74	1.09 1.34	0.922 1.094	0.837 0.973	0.752 0.856	0.734 0.741	0.619 0.684	0.575 0.628	0.529 0.573	0.484 0.518
11	7.20 ∞	4.22 ∞	2.99 15.75	2.15 5.00	1.59 2.70	1.26 1.85	1.05 1.41	0.896 1.134	0.816 1.004	0.735 0.879	0.651 0.757	0.609 0.698	0.566 0.639	0.522 0.582	0.478 0.525
16	4.96 ∞	3.35 ∞	2.53 ∞	1.91 7.22	1.46 3.22	1.18 2.07	0.99 1.53	0.856 1.208	0.784 1.061	0.709 0.921	0.632 0.787	0.592 0.722	0.552 0.659	0.510 0.597	0.468 0.537

かり巻きこんでしまわないように注意して、カメラから取り出します。引きこんだsprocket解除ボタン(19)は、フィルム巻上げレバー(1)を巻き上げますと、自動的に定常位置にもどります。

注意1. 規定枚数以上、撮影を進めますと(場合によっては規定枚数以内でも)巻上げレバー(1)が巻上げの途中で止まって、巻き上げられなくなります。この場合は、これで巻上げを中止して、フィルムを巻きもどします。

注意2. 途中で進まなくなった巻上げレバー(1)を、そのままむりして巻き上げてゆきますと、フィルムの終りの端末が、パトローネの軸から、ぬけて、巻きもどすことができなくなったりします。この場合は、手数でも暗室でカメラをあけ、パトローネを分解して巻きもどすほかはありません。

シンクロ撮影

シャッター幕が開くと同時に、閃光電球やストロボが発火することをシンクロといい、これを利用して行なう撮影をシンクロ撮影といいます。

シンクロ・ターミナル(21)は、FP用とストロボ(X接点)用の二種類になっており、いずれもJ

露出時間	$\frac{1}{1000}$ 秒 ~ $\frac{1}{60}$ 秒	$\frac{1}{30}$ 秒 ~ 1 秒
ターミナル	F P	X
閃光電球	FP用閃光電球	ストロボ, またはF級及びM級の閃光電球

IS・B型（ドイツ式）ターミナルをもっています。

ターミナルの種類と、使用する閃光電球またはストロボと、同調する露出時間との関係を示せば、前頁の表のとおりです。

ターミナルと同調する露出時間とは、それぞれ記号を同じ色で表わしてあります。

レンズを交換するには

レンズを交換するときは、右手でレンズ鏡筒をつかみ、中指でレンズ・ロック・ボタン（20）を、十分に押しつけながら、鏡筒を反時計方向に回して、鏡筒の赤丸印と、カメラ前面の赤丸印とを一致させて、はずします。次に交換レンズを取り付けるには、二つの赤丸印を合わせてから、時計方向に回して、ロック・ボタン（20）がパチンと落ち着くまで、締めつけます。レンズを交換するときは、被写体深度目もり（13）の刻まれている部分を、つかんで着脱するようにして下さい。

交換レンズとして35ミリ（F2.8、6枚構成、画角63°）、135ミリ（F2.8、5枚構成、画角18°20'）が用意されています。

レンズを、はずしますと反射鏡が見えますが、絶対にさわらないようにして下さい。もしゴミがついたら、ゴム球つきのチリ吹きで、吹き飛ばして下さい。



使用しないとき

1. 長期間カメラを使用しないときは、シャッターをセットしない（フィルムを巻き上げない）でおきます。
2. カメラは、40度以上の高温や零下10度以下の低温、並びに湿気と塩けを、きらいます。したがって炎天下で長時間むき出しにしておくようなことは、できるだけさけて下さい。
3. 保存する際は、ケースから出して、茶箱などの中へ、乾燥剤（シリカゲル）と、いっしょに入れておくのがよろしいです。そして梅雨期などには、取り出して外気に触れさせて下さい。
4. 異状を認めたときは、御自分で分解したり、注油したりなさらないで、カメラ店または当社サービス部に御相談下さい。

マミヤ光機株式会社サービス部
マミヤ光機・大阪サービス・ステーション
マミヤ光機・札幌サービス・ステーション

東京都文京区本郷1の7
大阪市東区南久宝寺町2の56 竹田ビル
札幌市南一条西3丁目 札石ビル

専用付属品

交換レンズ、専用露出計、レンズ・フード、フィルタ、接写用中間リングなどが用意されています。





マミヤ光機株式会社

東京都文京区本郷1の7